高崎経済大学論集　第43巻　第２号　2000　1頁～14頁

# 社会システムと社会理論の論理構造 (3)

## ―Ｊ．ハーバーマスとＮ．ルーマンの抗争をめぐって

武　井　　昭

# Die logische Struktur der Sozialsystemstheorie und der Theorie der Gesellschaft
## ―Im Hinblick auf die Kontroverse zwischen J. Habermas und N. Luhmann (3)

Akira TAKEI

はじめに
Ⅰ．アドルノ・ポッパー論争の遺産
Ⅱ．カテゴリーとしての社会システム論……以上、第16巻第４号
Ⅲ．社会システム論の論理……第17巻第１号
Ⅴ．社会シテスム論か社会理論か……以下、本号にて
おわりに

## Ⅴ．社会システムか社会理論か

### (1)　「二者択一問題」か「非二者択一問題」か

「社会システム論か社会理論か」という問いの立て方は、一般的には二者択一の答えが予想されている。論争が展開された当初は、立場の相違からハーバーマスとルーマンは決定的に対立すると思われていたが、長い論争の過程で両者はともに論争的立場から理解しあえる関係になり、二者択一の問題として受け止めるのは適当でなくなった。とくに、ルーマンの考え方を「ソーシャル・テクノロギー」で整理することは彼の本意でもないということになった。

しかし、彼ら二人を離れて、現代社会の本質的特質を図式的に明確にするときには、「二者択一的問題」として捉えることも意義のないことではない。さらに、彼ら二人の間にも、当然のことながら、社会システム論および社会理論の理解において決定的な意見や視点の相違が存在する。いや、彼ら二人が自ら混乱している部分や判断中止をしているだけで二人の間に宥和不能な論理の相違がみられる。特に、ハーバーマスの場合には、「社会理論」は「批判的社会理論」を意味しているの

か、「批判的」という形容詞は脱落するのか、あるいは部分的修正を意図しているのか、ということが、両者の論争のポイントになるのではと思われる。(1)

アドルノやマルクーゼなどの「批判的社会理論」は、ナチ時代の弾圧に服することもなく抵抗したことと大学紛争時代には社会主義をも含めた既存のすべてのエスタブリッシュメントに対する「意義申し立て」という徹底した「反体制」派の立場とオーバーラップするかたちで評価された。ソ連・東欧諸国の崩壊は、この二つの出来事を過去のものにする決定的な契機となった。立場は異なるとしてもハーバーマスもルーマンも'70年代までのこうした歴史に完全に決別できる新しい社会理論の構築を企図してきた。それ故に、ハーバーマスもルーマンも従来の批判理論や社会システム論ではともすればイデオロギーの対立に発展することを配慮して積極的にたがいの理論の複雑性を縮減することで、両者が了解できる領域を可能な限り拡大する方向を選択した。とはいえ、二人が立っている地点は根本的に異なるため、「社会システム論か社会理論か」の二者択一の問題として捉えるしかない側面とシステムに対する基本的理解に関しては「社会システム論も社会理論も」という非二者択一の問題として捉えるのが妥当である側面もある。このような視点から論争の結果を整理することができるのではないか。

1)　「社会的統合」か「システム的統合」か；システム論的関係か生活世界的関係か

ルーマンが捉えようとしている社会は、途方もない量の情報と情報システムの複雑性の縮減の要請に応えることが不可避である現代の社会である。この点では、ハバーマスも同様であることはいうまでもないが、ルーマンの場合には、現代社会は、機能分化が著しく進んだために、自己も他者も何らかの実体のあるものを媒介にして捉えることが不可能になった「脱中心社会」であるとみる。つまり、機能分化したサブシステムとサブシステムの間の相互関係は、それぞれのサブシステムが自律的な「閉じたサブシステム」としての一応の統一性（ユニティ）を持つことを相互に認知しあうしかないことから、認知された組織同士は限られた範囲内で密接に機能的関係する。その結果、現代社会の統一性は、機能分化したサブシステムとサブシステムの単純な統合でも総和でもなく、表６に見るように、特定のサブシステムに準拠する限りで統一性を持ったサブシステムの単なる集合体でしかない。

さて、ルーマンのいうこの全体社会はいま現在進行中の社会であって、過去および将来のそれではない。彼はこの先進国の現実の社会の全体を捉えようとしているのであって、この社会をある一定の判断に基づいた歴史的存在とみられるものを一切切り落とそうとする。歴史的存在とみられる、政治、経済、学問、家族、教育、宗教などの機能的に分化したサブシステムは、権力、貨幣、真理、愛、選抜、絶対者といったシンボルによって一般化されたコミュニケーション・メディアとして捉える。

これらのシンボルは相対的なもので現時点においてサブシステムとして安定する条件を備えていると評価されただけで、環境が変われば、他のシンボルに取って代わる可能性がある。だが、表6のように機能的に分化したサブシステムの中に「社会」は含まれていない。ルーマンにとっては、

全体社会と区別される、ドラッカーが20世紀を「社会の世紀」と呼んだ意味での社会は、サブシステムの集合体の意味での全体社会システムのことであるため、サブシステムとしての社会が欠落することになるのである。例えば、福祉国家は経済システムと政治システムに匹敵する社会システムではなくて、経済システムないし政治システムのさらに上位にあるシステムとして捉えられていることになる。この点にもルーマンの社会理論がシステム一元論の性格が強くあらわれているといえよう。もちろん彼の意識の中にサブシステムとしての社会システムが欠落しているからといって、ルーマン個人が現代社会の評価に対して独断的であるとは必ずしもいえない。現実の社会を直視することに徹することとこうした意識がないことは同義である。だが、結果的には方法論的にシステム論に徹する、システム一元論という独断の構造になっているのである。

それに対して、ハーバーマスは、「近代」とか「ポスト・モダン」といった時代意識をもって現代社会の全体を捉えようとする。彼は、ルーマンの「社会システム」に対して、社会を「生活世界」(ゲゼルシャフト・文化・パーソナリティ)と捉える。(1) この生活世界の地平は、相互行為の参加者たちのゲゼルシャフト・文化・パーソナリティに関して直観的知を取り込んだときの人間社会のことである。この「直観的知」に基づいた生活が生活世界でいう生活をさすが、それを具体的に捉えるときには、今日では、「社会」(ゼゲルシャフト)と「社会的統合」(ゾチアール・インデグラティオン)の二つの意味を含めて捉えている。ハーバーマスがルーマンの志向する「システム的統合」と重なる可能性の高い「社会的統合」の意味で生活世界を捉えるに至ったのは彼との論争によってである。

ルーマンも、機能分化した今日の社会では、サブシステムとサブシステムの間のインパーソナルな関係が途方もなく増大する傾向は避けられないとしても、他方で人間は自らの主体的な判断に基づいて多様なサブシステムに関係するというパーソナルな人間関係が尊重されるとみる。しかし、自律的なサブシステムが増大するという限りで、その社会は発展し、また個人の多面的な要求が充足される、という意味において生活世界的側面との接点があるにすぎないと考える。

ハーバーマスもルーマンも基本的にはゲゼルシャフトの意味での「社会」観に立っており、ゲマインシャフトのそれではない。しかし、ハーバーマスの場合には社会システムとは区別される全体

**表6　全体社会システム**

| | 機能的に分化した<br>社会のサブシステム | シンボルによって一般化された<br>コミュニケーション・メディア |
|---|---|---|
| 全体社会システム | 政治 | 権力 |
| | 経済 | 貨幣 |
| | 学問 | 真理 |
| | 家族 | 愛 |
| | 教育 | 選抜 |
| | 宗教 | 絶対者 |
| | etc. | etc. |

出所：清水多吉稿「ドイツ的ポスト・モダン論に抗して」、ハーバーマス〔15〕所収、419 頁。

としてのゲゼルシャフトの解明が中心的関心であるのに対して、ルーマンの場合には基本的には多元的なシステムのシステム的関係の枠を超えていない。つまり、ルーマンもゲゼルシャフトの意味での「社会」を、相互行為と組織体と並んでその存在を認めてはいるが、ゲゼルシャフトの意味での「社会」が原型ではなく、「ゾチアール」の意味の社会、つまりシステムを意味する「社会的に統合された社会」が原型となると捉えている。

ルーマンのいうゾチアールの意味での「社会」は、「生活世界」ではなくて、「環境」にすぎない。それに対して、ハーバーマスの場合には、ゼゲルシャフトの意味での社会は、「近代」とか「ポスト・モダン」といった時代意識の中に現実に生きている人たちによって構成されるものを想定している。したがって、ルーマンのように多様なシステムの並立的関係として社会全体を捉えるのではなくて、彼は表７のように、経済システムと国家管理システムとの関係が社会全体を代表すると捉える。だが、ホルクハイマーやアドルノらの「批判的社会理論」派の人たちが捉えていた実在としての「社会」（ゲマインシャフト）的アプローチだけでは、今日のようにゲゼルシャフトとしての「社会」の比重が大きくなり、機能的に形成されるシステム的世界に圧殺されかねない状況のもとでは、このシステム的世界を批判するだけでなく、市民の自然な意志が活かされる「社会理論」を

**表７　生活世界とシステムの関係**

| 生活世界 | 交　換　関　係 | システム |
|---|---|---|
| 私的領域 | １．従業員としての役割<br>労働給付<br>→<br>賃　　金<br>←<br>２．消費者としての役割<br>需　　要<br>→<br>消費財貨<br>← | 経　　済 |
| 公 共 性 | １．被保護者としての役割<br>租　　税<br>→<br>国家の組織的給付<br>←<br>２．市民としての役割<br>大衆の忠誠<br>→<br>政治指導<br>← | 国家管理 |

出所：ハーバーマス〔14〕、49頁。

構築されねばならないとき、少なくとも「社会」という概念では抽象度が高すぎるので、「生活世界」という概念に抽象度を還元する必要があるとハーバーマスは考えた。「生活世界」で捉えるならば、方法論的に限られるとしてもコミュニケーションや意味理解という行為を介してシステム的世界と接点を持つが、システム的意味に限定した社会概念からの分析だけでは、その地平は限られるからである。

具体的には、ハーバーマスは、「社会」と「社会的統合」を明確に区別し、ドイツにおいて「社会的統合」を志向することによって実現する社会、つまり社会国家が機能的に分化したサブシステムの「社会」に該当すると捉える。しかし、表７のように、彼は生活世界とシステム的世界の関係をルーマンのようにシステム的世界に統合されることによって資本主義体制に内在する闘争が克服される可能性を認め、「社会的統合」のメリットを限定つきで評価する。このことに見るように、ハーバーマスの「生活世界」の概念は、基本的には資本主義の経済体制および階級社会というこれまでの歴史的規定の遺産を引きずっている。

2)　システム論的アプローチが社会理論的アプローチか；「方法論」の相違

ルーマンは一貫してシステム論的アプローチを取るのに対して、ハーバーマスは一応「批判的社会理論」の立場に立つ。この批判的社会理論は方法論的にはどのようなアプローチになるのか。ハーバーマスの視野の中に、現象学的アプローチ、言語論的アプローチ、解釈学的アプローチ、存在論的アプローチ等が入っているが、敢えていえば、言語論的アプローチを中心にして、現象学的アプローチと解釈学的アプローチを援用した方法論といえなくもない。彼の学問的経緯からすると、基本的には従来の批判的社会理論に与するしかないが、従来の批判的社会理論の発展ないし現代化を志向して、彼は言語論的アプローチの導入を決断することで、方法論的に従来の批判的社会理論が陥りがちなイデオロギーに直結する「超越論的決定論」から訣別した。それによって、現象学的アプローチや解釈学的アプローチはもとより、システム論的アプローチとも接点をもつ限り導入することが可能になった。

本来、システム論と批判理論はそのめざすベクトルは完全に逆であったが、ハーバーマスが言語論的アプローチを導入することによって、彼が企図する現代における普遍的社会理論と、ルーマン的社会システム論の中心概念であるコミュニケーション、価値、意味理解と重なる部分が理論的にも、現実的にも生じてきた。これによって従来の批判的社会理論では社会システム論は批判の対象とされたのに対して、社会システム論も最初から一方的に排除できない理論構造となったことで、実質的内容的に受容できないとしても、一方的に批判の対象とすることだけはできなくなった。

ハーバーマスの場合には、政治的社会的に最も重要な問題について各個人が現実の生活世界の中で最高の水準の「直観知」に基づくコミュニケーションである「討議」（ディスクルス）により抽出された意味理解であるのに対して、ルーマンの場合には、「複合的で変化しうる環境において内／外の差異の安定化を通して自己を維持する同一性というシステム／環境の一般的関係の中で展開された限りでのコミュニケーションとそのシステムで捉えられる限りでのそれでしかない。

したがって、「価値」についても、社会システム論の場合には、「価値の相対化」が絶対的与件となるため、その条件が最優先されるサブシステムにまで複雑性の縮減が行われることになる。さらに、その縮減の効率を高めるためには、「価値の相対化」の一般化が必要になる。その一般化が不十分であるとき、それだけ価値観の対立がラディカルにあらわれることになる。このことを避けるために､ルーマン自身が精力的に主要なサブシステムの社会システム論化に取り組むしかなかった。

しかし、他方、サブシステムのサブシステム化が進み、自己の関係するシステムの全体におけるアイデンティティを見出しえなくなり、全体システムの「社会的統合」の機能に支障がでてくる危険性がある。

ルーマンのシステム論的アプローチでは、確かに従来のイデオロギー的対立を緩和するのに有効であるが、価値の相対化が一般化したとき原理的にこの危険性を煽ることはあっても鎮める可能性に乏しい。また、サブシステムのサブシステム化により、末端のサブシステムは常に進化・発展することが運命づけられているにもかかわらず、そのサブシステムのシンボルを統合する長期安定状態のコミュニケーション・メディアとなったとき、それらを含む全体社会システムの合理性が崩れることになる。総じていえば、システム論的アプローチは、サブシステムのサブシステム化の進展による複雑性の縮減によるメリットは認めざるをえないが、システムの硬直化（閉鎖性）の性格のために全体システムのダイナミックな発展にはネガティヴになるという欠点がある。

3)　機能-構造主義か構造-機能主義か；「複雑性の縮減」という効率か批判を通した「理想社会」の実現か

この社会システム論的アプローチの欠点は、全体システムの発展や維持に対して、それぞれのサブシステムに固有の「機能」が存在し、機能間に優劣はつけられないということが前提となっているため、一度構築されたサブシステムは永続性のある安定したものとなったとしても、中世社会ならいざ知らず、近代社会では原理的にはこの前提は容認されないこととなっているということである。つまり、「複雑性の縮減」によりえられたサブシステムの硬直化の弊害を解消する装置がいまだ開発されていないということである｡こうしたことについての意識は後になって生まれてくるが、ルーマンにはそれがないため、それだけ説得力に欠けるという印象を禁じえない。ルーマンはパーソンズの「構造-機能主義」の社会システム論を「機能-構造主義」に転換したといわれる。ハーバーマスがシステム理論を評価するのは、ルーマンの「機能-構造主義」の社会システム論よりも、パーソンズの「構造-機能主義」のそれの方である。構造優位の機能の方がゲゼルシャフトの意味での「生活世界」においてコミュニケーションによりインプットされた意味が社会に深く根づいたものになるからである。それに対して、機能優位の構造になると、「操作可能性」（複合性の縮減）が優先されるため、それだけシステム合理性優位のために硬直化した社会となる。それでもルーマンは社会システムにおける「操作可能性」の中心にコミュニケーションを規定的要因にすることでオートポイエーティック・システムの形成に道を拓き、一応先述のシステム論的アプローチの硬直化の欠点を克服できるとみる。(2)

彼のいうオートポイエーティック・システムとは、生命システムに典型的に見るように、「自己言及的閉鎖性を使用するシステム構築の一般的形式」のことをいう。それを社会システムに当てはめると、オートポイエーシス的閉鎖性（「閉じたシステム」）を使用するシステムの構築はコミュニケーションを規定的要素として「意味」に基づいてシステムが再生産される。こうしたオートポイエーティックな社会システムが存在するときには、サブシステムに限定されるかたちであれ、機能と構造が一体となった自律的なシステムとなり、時代の変化に自動的に適応していくことが可能になる。

このシステムも「社会」（環境）に開かれているからといって、言葉の完全な意味での自律したシステムではない。ルーマンは一般システム論の持つ妥当性は社会システム、引いては現代社会についても妥当するという仮説から出発し、コミュニケーションを規定的要素にして、後述するように、「構造的カップリング」の問題を解決する構造を明らかにすることができると考えている。ルーマンにとっては、システム論的アプローチにどのような欠点があろうとも、彼の目から見ると、この方法は「複雑性」が過剰になった現代社会の解明に対して唯一可能な方法である限り、いずれ欠点はすべて克服される。その一つ一つ克服される過程はシステム的合理性が高まり、社会的にも合理的であるはずである。こうした意味において、ルーマンの社会システム論は「メタ理論」であると言えよう。

これに対して、ハーバーマスは、今日では、システム世界の構築をめざすことにそれなりの妥当性は認められるとしても、人間はいかなるシステムにも満足することができず、絶えず「理想的社会の実現」をめざす生活世界の中に生きている。彼の考える理想社会は、生活世界とシステム世界の綜合をめざすものであって、必ずしもマルクスのようなグランドモデルを構築し、その実現をめざすという理想をさしてはいない。それでもルーマンがシステム的世界に限定したかたちでの綜合的社会理論を構築しようとするのに対してハーバーマスは「生活世界」の中でのディスクルスによりシステム世界との綜合化を現実に行おうとするため、ルーマンより実践的であり理想主義的であるといえる。その限りでハーバーマスの社会理論はルーマンのそれより「メタ理論」的ではないといえる。

生活世界とシステム世界の綜合した社会理論の構築をめざすハーバーマスは、ルーマンのように機能-構造主義に徹した社会システム論には与することができないため、広い意味ではパーソンズの立場である構造-機能主義に属するが、機能主導の社会システムが社会理論の中で、その比率を拡大することは避けられないとみるが、いわゆる「社会」を「生活世界」という概念にまで還元したために許容せざるをえない限りでのことにすぎない。ハーバーマスの意識の根底には、「歪められたコミュニケーション」と「生活世界の植民地化」のイメージがある部分を占めている。その是正につながるコミュニケーションがディスクルスであり、公正としての正義が展開される場所が生活世界である、という考えが根を張っている。

4)　意味論か意味理解（意味解釈）か

ルーマン・ハーバーマス論争が華々しく展開される少し前に「ガダマー・ハーバーマス解釈学論

争」が展開された。ハーバーマスが彼の思想の基盤を生活世界にまで還元したためにディスクルスのときの双方の意味理解がその内容を規定するが、その時問題になる文脈をさすテクストないしコンテクストの解釈学的次元での活動そのものがその内容となる。この点でガダマーの解釈学と接点をもち、彼が展開した伝統や制度に内在する普遍的真理に至る方法が提示されている点をハーバーマスは評価する。「共同主観的な意味理解への解釈学的な認識の関心は、同時代人のコミュニケーションだけでなく、伝統媒介という仕方で、過去の人類と現在生きている者とのコミュニケーションにも同時に関わっている。ここで、解釈学的反省は、理解者（認識主観）自身の歴史性と、テクスト（認識の客観）の歴史性とを明らかにし、さらに相互の影響活動を究明することによって、科学主義や歴史主義にすらみられる、客観主義的な方法の理想が打破される可能性がある」と解釈学の意義を積極的に評価している。

確かにガダマーは人間の世界経験と生活実践の全体を問い、しかもその問いは言語に媒介され、日常言語に求める点でハーバーマスのコミュニケーション論に極めて近いが、彼は解釈するときの最大の地平を「伝統という出来事」への参加という存在論への転化に求めるため、「言語性の観念論」に陥るとハーバーマスは批判する。ハーバーマスの場合には合理主義的啓蒙の流れの中で「イデオロギー批判を反省力の中心にした」意味理解の構造を明らかにしようとするため、両者のベクトルの方向は逆になる。つまり、ハーバーマスは、ガダマー解釈学のように「意味解釈」ではなくて、「批判的諸科学」に顧慮を払う解釈学的哲学的構想の必要性を主張する「意味理解」の立場をとる。

これに対して、ルーマンは、社会システムと心理システムは何らかの意味統一を要素とする「意味構成的システム」であるが、そのシステムの意味は具体的に形成されるものというよりは、意味が暗黙のうちに付帯された「情報」（テキスト）として扱われるものであるとみる。つまり、意味論の展開は可能であるが、「意味」そのものの理解というハーバーマス的意味での「意味理解」ではシステムそのものの本質に到達することができない。システムそのものの本質はこの意味理解を止揚することによって初めてその意味するところの意味に到達できる。したがって、ルーマンも含めて、社会システム論そのものである、「システム／環境」図式には本来的に存在する以下のようなパラドックスが存在する。すなわち、「主体概念に意味概念を先行させる社会システム論の戦略は、結局意味概念をふたたび主体概念に従属させるというパラドックスに帰結する。」(3)

こうした「構造的カップリング」の問題に対応することが社会システム論の「意味理解」の内容を規定することになるが、この問題に対してもルーマンは社会システム論の立場を貫くためにコミュニケーション・システムに限定した構造的カップリングを扱うことになるため、その解決のチャンスを猶予することになる。

さて、これまで社会システムと社会理論の関係について「二者択一問題」か「非二者択一問題」か、ということでハーバーマスとルーマンの考え方を対比させ、検討してきた。ルーマンもハーバーマスのいずれも基本的には「二者択一問題」として捉えるよりも、最大限可能な範囲の許容をして「非二者択一問題」としての立場をとってきた、と見るのが妥当である。その限りで、「社会シ

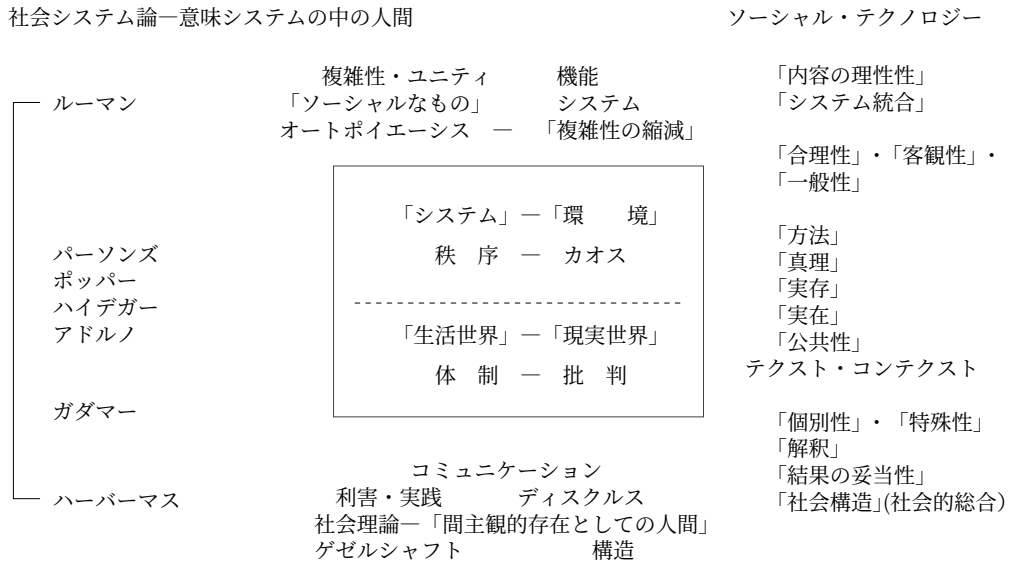


**図１ 社会システムと社会理論の関係**

ステム＝社会理論論争」ではなくて、「ハーバーマン＝ルーマン論争」であったといえよう。多くの論争がともすれば陥りがちな自己の立場に固執するイデオロギーの対立になって終息することなく、ハーバーマスとルーマンの真摯な二人の学者の論争（ディスクルス）に終始した。

とりわけ、ハーバーマスは、ホルクハイマーやアドルノらの取っていた「批判理論」の立場を或る意味では根底から否定につながりかねない、近代市民社会を積極的に承認し、合理主義の啓蒙性に依拠する社会理論の構築の方向を鮮明に打ち出した。これによってルーマンが立脚するシステム的世界と生活世界と関係の解明の問題が彼の中心的課題となった。この転換によって、システムオリエンティドな社会理論とシステム-生活世界関係の社会理論が質的量的にカヴァーできる領域とできない領域の検証の問題に転化することになった。

**(2) ポスト形而上学の思想とテクノロジー**；「システム的世界」と「情報革命」

ハーバーマスにせよルーマンにせよ、大きく変容しつつある現代社会を直視し、その全体を普遍的一般的に再構築することに腐心してきた。そうした二人をドイツ思想界では「ポスト形而上学」の機首としての位置づけをしてきた。

さて、こうした位置づけが妥当であるかどうかは、第一に、それ以前の形而上学時代と決定的に異なる状況は何なのか、第二に、ポスト形而上学の時代を象徴するキーワードは何なのか、そして第三に、それがソーシャル・テクロノジーとどのような関係にあるのか、こうした三つの課題に応えることで、本稿のハーバーマス=ルーマン論争の考察のまとめとしたい。

ポスト形而上学の時代への突入の契機は、1870年頃に始まるとされる「組織革命」に遡ることは異論のないところである。ところが、この革命だけの方向で世界は進展せずに、第一次世界大戦の

終了後にロシア革命によるマルクス・レーニン主義に基づく計画経済型の社会主義国家ソ連が誕生した。他方、この50年間の「組織革命」の総決算を余儀なくされ、1929年にアメリカで「世界大恐慌」が勃発し、第二次世界大戦にまで発展することになった。

戦後は、この大戦の思想的根拠となったファシズムに対する処理と二つの大戦の遠因となってきた「組織革命」の結果としての一切のエスタブリッシュメントに対する抵抗の機運が高まり、大学紛争が起こり、その延長線上で1973年の第一次石油ショックへと発展していった。それを契機にして「エレクトロニクス革命」が始まり、「形而上学の時代」の終息が近いことは明白になった。それを決定づけることになったのは、ソ連・東欧諸国の崩壊であった。

このようにみるならば、「形而上学の時代」と「ポスト形而上学の時代」を画する決定的な出来事は「組織革命」に求められる。この革命が進行するにつれてそれぞれの時代を画するキーワードは誕生した。その流れは、図２のように、計画―コントロール―マネジメント―オペレーションの順に発展してきた。この流れは、対象である社会経済に対する「干渉」の程度が直接性、法則性、技術性の程度の濃淡に一定の方向性を見ることができる。つまり、これらのキーワードの背景にある傾向としては「形而上学性」が希薄になっているということである。

ハーバーマスの場合には、まだコントロールの段階の社会理論が求められているのに対して、ルーマンは、オペレーションの段階のものを期待している。彼ら二人の間にはマネジメントの考え方が欠落している。個々の組織が存続発展するための最も合理的で妥当な戦略を考えるとき、初めてマネジメントの考え方が必要になるが、社会システム論や社会理論の構築にはこれは直接関係しない。

こうしたマネジメントの考え方が欠落しているために、彼ら二人の理論は政策科学はもとより政策理論も不十分で、まだ方法論が優位する純粋理論の構築の段階にすぎない。特に、ハーバーマスの意識の中には、「ポスト形而上学の時代」の意識と「批判的社会理論」の人たちに共通している「形而上学の時代」意識をも継承する必要から、システム的世界と生活世界の理論的に統合するために、社会システム論の属性とみられる「操作可能性」に対して開かれた関係をもディスクルスにも込められている。いわゆる、「生活世界の植民地化」の克服の倫理である「ディスクルス・エティーク」に客観的合理性のみのシステム的世界の持つ弊害の克服の原動力となることを彼は期待する。

ハーバーマス自身は「ディスクルス・エティーク」の範囲内で展開される議論は全てポスト形而上学の時代の論議であるとする。その場合でも彼は、市民社会的自由が保証された中でのディスクルス・エティークであれば、イデオロギー性は皆無に等しいと考えているのであろうか。

ルーマンのシステム論についても、一般システム論はともかく社会システム論についてはまだ理論的に未完成であるため、システム工学的レベルでの「操作可能性」の領域は現実に大きく拡大するまでには至っていない。社会システムに関しては、技術的発展を伴ったものになるにはまだ多くの時間を要する。その限りでは、まだ「ポスト形而上学の時代」の社会理論とはいえない。しかし、最近の「情報革命」の急速な進展により、社会システムにおいても「操作可能性」の領域が急速に拡大する可能性が出てきた。

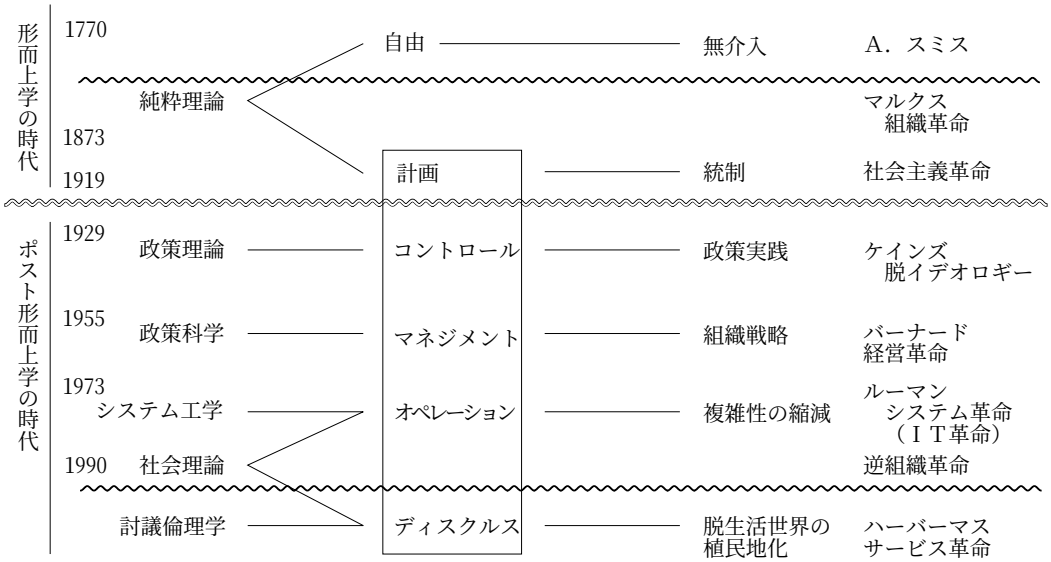


**図２　ポスト形而上学の時代の社会システム論の構図**

今日のような社会経済システムや組織の形成の直接の契機は上述のように19世紀後半の「組織革命」に求められるが、その革命の進展とともに実存主義、歴史主義、民族主義、宗教的ファンダメンタルスなどあらゆる、イデオロギーに発展する可能性のある「形而上学的な要因」は徐々に取り除かれ、それにつれてそれぞれの「複雑性の縮減」が進み、サブシステム間の関係は複雑をきわめるようになる。それにつれてそれぞれのサブシステムに固有の価値に従わざるをえなくなるため、多くの人が「価値観の多様化」の印象を抱くようになる。

ルーマンが指摘するように、こうした傾向があることは否定できない事実であるが、しかしだからといってハーバーマスが展開したように「生活世界」とディスクルスの関係というパラダイムによって、これまでの批判的社会理論の議論と比べて格段に理論的発展の成果もまだ現れていない。ハーバーマスとルーマンの問題意識でカヴァーできる地平は、現代社会がかかえている決定的に重大な問題に必ずしもポジティブに作用しているとはいえない。

彼らが自らの社会システム論や社会理論の完成に向けて呻吟している間に、ソ連・東欧諸国の崩壊や情報革命の急激な進展により、彼らの理論構築の背景にある「組織革命」による組織の巨大化・高度化・複雑化の弊害の緩和や除去につながりかねない「逆組織革命」とでも呼ぶべき状況ができてきた。企業や行政組織内での一定の空間での直接のコミュニケーションないしディスクルスの必要性は著しく制限され、さらにそこでのワークのビジネス性や機能性も組織に固有のものの比重は著しく低下し、逆にシステム的世界の論理に従わざるをえない可能性が高くなってきた。

また、ソ連・東欧諸国の崩壊によってこれまで東西の冷戦構造の基盤とされてきた経済体制は社会的存在を規定する要因ではなくなり、それより根底にある、「宗教や民族」のダイナミックな発展の問

題をも機能-構造的ないし構造-機能的に捉えられる社会システム論や社会理論が期待されている。ハーバーマスのディスクルスの中心的問題群は､｢政治と経済｣の関係図式で捉えているが､この図式では今日起こっているシステム的世界に内在する諸問題に対応するには余りにも政治的すぎる。

こうしたことを視野に入れるとき、彼ら二人の社会システムと社会理論に欠落したものこそ今後重要になるであろう。先進国では、アメリカで展開された「普遍主義対共同体主義」の論争でとりあげられる共同体の問題、途上国ではカトリシズムに基盤をおいたシューマッハーの社会経済論そして何よりもガダマーのいうシステムそのものの本質の解釈の問題などは大きなヒントとなるであろう。「生活世界とディスクルスの関係」を問うことの方法論的意義は小さくはないが、具体的問題として、「宗教と環境の関係」の地平をどのように捉えるのか。その場合、失われた「共同体」の回復の問題と地球環境問題の根本的解決につながることを最優先する社会理論の構築が求められているのである。

## おわりに

(1)　「ハーバーマス=ルーマン論争」が展開されて30年近くになる。すでにルーマンはこの世にいない。この論争はドイツはもとより、フランス、アメリカ、日本など世界中に大きな影響を及ぼしてきた。特に、ルーマンはこの論争によって脚光を浴び、社会システム理論の開発の第一人者の地位を築いた。

ハーバーマスは、ポッパー＝アドルノの「実証主義論争」の地平を根底から拡大する「生活世界とコミュニケーション行為」の関係の問題提起により、ルーマンとの理論的接点が拡張し、まれにみる実りのある長期的な論争となった。その最大の成果は、彼ら二人の主張に限られるにせよ、社会システム論と社会理論の射程が拡大し、しかも明確になったことである。ルーマンの社会システム論は、表６のように、全体の社会システムを構成する要素、つまり政治、経済、学問、家族、教育、宗教などの個々のサブシステムの全体よりなるとされ、また彼によってこれら個々のサブシステムの機能-構造的関係が具体的に抽出された。しかし、サブシステムの理解といえども、時代､社会、伝統、制度、歴史などの相違を考慮したものであるべきであるにもかかわらず、その要因を排除するかたちで展開するしかないため､所詮現代の欧米諸国のシステムに準拠したものに限られた。

ハーバーマスの「生活世界とディスクルスの関係」についての理論的発展の一つは、「ディスクルス・エティーク」の概念に見られる。この現実的発展は、ハーバーマス自身がガダマー、ルーマン、フーコー、デリダ、リオタール、ヘンリッヒなどとの直接的間接的ディスクルスでの成果に代表される。彼らとのディスクルスの展開によって彼の理論的実践的関心の地平は拡大し、質的にも深さを増し、ディスクルスの有効性を実証しているともみることができるが、しかし、彼のコミュニケーション論から見た解釈学、社会システム論、ポスト構造主義などとの距離の再確認の域を出ていないともみることができ、その限界を示しているともいえる。

(2)　ハーバーマスとルーマンの関心は現代社会の解明にあるが、現実の社会の変化のスピードは彼らの想像を超えているため、彼ら自身のシステムの縮減に対するオートポイエーシスのはたらきが停滞し、抽象的な理論的説明に拘泥しがちとなる。とくに、ソ連・東欧諸国の崩壊により、民族と宗教の対立が先進国途上国を問わず現れ、またＩＴ革命の進展でこれまでのスケールでは推し測れないコミュニケーション的行為に量的質的変化が生じてきた。この変化に対応した社会理論や社会システム論を展開するには彼らの理論の枠を大幅に拡張する必要がある。

中心のないサブシステムが急増する社会経済的背景の一つである「組織革命」がインターネットの普及によって「逆組織革命」が始まり、これまでのような社会システム論やそれに依拠する社会理論だけでは、時代の要請に応える理論としては不十分になりつつある。また、ハーバーマスが切り開いた「生活世界とディスクルス」の関係図式にしても、ソ連・東欧諸国の崩壊等で「宗教と民族」の対立がストレートに現れる段階では、「政治と経済」を中心にした関係構造での市民的自由主義的コミュニケーション論の展開に大きな期待を寄せるほど時間的余裕がなくなりつつある。

こうした構造変動をとげつつある今日ハーバーマスやルーマンが腐心した問題群よりはるかに広く深くかつダイナミックな社会システム論や社会理論が求められている。その場合、少なくともこれまで主流であった機能主義を基調にしたものではなくて、ガダマーが洞察するように、システムそのものの本質を解明した上でのダイナミックな社会構造の解明が期待されているといえよう。

（たけい　あきら・本学経済学部教授）

**註**

(1)　Lebenswelt　の訳語として本稿の(1)と(2)では、「生活の場」としたが、今日では「生活世界」が一般化しているため、(3)では「生活世界」に変えた。同じく、Reduktion der Komplexität　については、「複合性」とか「還元」・「制限」などの訳語も見られるが、「複雑性の縮減」に統一する。Habermas　の表示に関しては「ハバーマス」ではなくて、「ハーバーマス」とする。

(2)　機能だけのシステムもなければ、構造だけのシステムも存在しない以上、オートポイエーティック・システムを据えることによる構造もそれに見合ったものが形成されるが、その構造の展開するシステム論的構造の解明がなぜ重要であるかの構造の解明が求められているのであって、そのサブシステムの構造ではない。

(3)　正村〔29〕229 ページ。

**参考文献**

(1)　河上倫逸編『社会システム論と法の歴史と現在』、未来社、1991年
(2)　イリイチ、Ｉ.「エコクラシーへの挑戦」、岩波書店編集部『現代文明の危機と時代の精神』、1984年所収。
(3)　『哲学のポスト・モダン』、今村仁司監訳、ユニテ、1985年
(4)　ルーマン、N.『制度としての基本権』、今井弘道・大野達司訳、木鐸社、1989年
(5)　ルーマン、N.『社会シテスムのメタ理論』、土方昭監訳、新泉社、1984年
(6)　ルーマン、N.『法と社会システム』、土方昭監訳、新泉社、1983年
(7)　ルーマン、N.『社会システム理論の視座』、佐藤　勉訳、木鐸社、1985年
(8)　ハーバーマス、J.『コミュニケイション的行為の理論』(上)、河上倫逸、フープリヒト、平井俊彦訳、未来社、1985年
(9)　ハーバーマス、J.『コミュニケイション的行為の理論』(上)、丸山高司、丸山徳次、厚東洋輔、森

田数実、馬場浮瑳江、脇圭平訳、未来社、1987年
(10)　ハーバーマス、Ｊ.『社会科学の倫理に寄せて』、清水多吉、木前利秋、波平恒男、西坂仰訳、国文社、1991年
(11)　ハーバーマス、Ｊ.『新たなる不透明』、河上倫逸監訳、上村隆広、城達也、吉田純訳、松頼社、1995年
(12)　ハーバーマス、Ｊ.「神話と啓蒙の両義性―『啓蒙の弁証法』再読」、岩波書店編集部『現在文明の危機と時代の精神』、1984年所収。
(13)　ハーバーマス、Ｊ.『未来としての過去』、河上倫逸・小黒孝友訳、未来社、1992年
(14)　ハーバーマス、Ｊ.『法と正義のディスクルス』、河上倫逸編訳、未来社、1999年
(15)　ハーバーマス、Ｊ.『法制化とコミュニケーション的行為（ハーバーマス・シンポジウム）』、河上倫逸・フープリヒト編訳、未来社、1989年
(16)　ハーバーマス、Ｊ.『ポスト形而上学の思想』、藤沢賢一郎・忽那敬三訳、未来社、1990
(17)　ハーバーマス、Ｊ.『近代の哲学的ディスクルス　Ⅰ・Ⅱ』、三島憲一・轡田　収・木前利秋・大貫敦子訳、岩波書店、1999年
(18)　ハーバーマス、Ｊ．＝ルーマン、Ｎ.『批判理論と社会システム理論（上・下）』、佐藤勉・山口節郎・藤沢賢一郎訳、木鐸社、1993年・1995年
(19)　村中知子『ルーマン理論の可能性』、恒星社厚生閣、1996年
(20)　土方　透編『ルーマン／来るべき知』、剄草書房、1990年
(21)　新田俊三編『社会システム』、日本評論社、1990年
(22)　山本　啓『ハーバーマスの社会科学論』、剄草書房、1980年
(23)　河上倫逸編『社会システム論と法の歴史と現在』、未来社、1991年
(24)　池上哲司・内山勝利編『解釈学の根本問題』、瀬島豊、塚本正明他訳、晃洋書房、1979年
(25)　中岡成文『ハーバーマス―コミュニケーション行為』、講談社、1996年
(26)　丸山高司『ダガマー―地平の融合』、講談社、1997年
(27)　Ｇ・クニール＆Ａ・ナセヒ『ルーマン／社会システム理論』、舘野受男・池田貞夫・野崎和義訳、新泉社、1995年
(28)　佐藤勉編『コミュニケーションと社会システム―パーソンズ・ハーバーマス・ルーマン』、恒星社厚生閣、1997年
(29)　正村俊之稿「社会秩序はいかにして可能か―パーソンズとルーマン」、佐藤勉編『コミュニケーションと社会システム―パーソンズ・ハーバーマス・ルーマン』、恒星社厚生閣、1997年、所収
(30)　W. Outhwaite, HABERMAS；A Critical Introduction, Policy-Press, 1994
(31)　Ｄ、ラスマッセン編『普遍主義対共同体主義』、菊池理夫・山口晃・有賀誠訳、日本経済評論社、1998年
(32)　Ｅ．Ｆ．シューマッハー『スモール・イズ・ビューティフル』、小島慶三訳、講談社学術文庫、1979年
(33)　Ｅ．Ｆ．シューマッハー『スモール・イズ・ビューティフル再論』、酒井愁訳、講談社学術文庫、2000年

**付記**

拙稿「社会システムと社会理論の論理構造(2)」を脱稿して25年余を経過してここにその(3)を書くに至った。25年前ではおそらく日本では「ハーバーマス＝ルーマン論争」を紹介した最初の文献の一つではあったが、若気の至りなりにその当時の構想で一気に書くこともできたが、この論争は長く続くような印象を持ったことからある程度の方向が見えてから書けばよいという気持ちに駆られている間に今日になってしまった。

25年前の(1)と(2)を読み返してみると、基本的には誤りはないとしても、その後のその方面での共通認識のレベルと比較すると、誤りや不適切な表現等も少なくない。本稿の(3)では紙幅の都合でハーバーマスとルーマンがこの間に行った理論的発展をトレースせずに、かれらふたりが到達した時点から「社会システムか社会理論か」の問題と「ハーバーマスかルーマンか」の問題を重ね合わせるかたちでこの間の問題状況を整理することになった、ことを付記しておきたい。